

## 英訳「老残遊記」

樽本照雄

劉鉄雲「老残遊記」の英訳本について書こうと思ったのには、きっかけがある。2005年にハロルド・シャディックの英訳本が装いを新たにして出版されたからだ。

半世紀以上も昔の英訳本が、現在にいたるまで有用であるのは、慶賀すべき現象である。息が長く生命力の強い翻訳であることの証明であろう。現在の中国でその価値が認められているからこそその重版だと思う。

### 1 問題の所在

のちほど詳しくのべるが、もとの英訳本には、「老残遊記」の版本について訳者シャディックによる解説がついている。その説明を漢訳しているのも、今回の新しい工夫だということができる。だが、解説の一部は、内容がすでに古くなっている、あるいは不十分なのだ。ところが、英文を漢訳した人、編集者はそれが時代遅れだという判断を下すことができないらしい。私がそう考えるのは、解説について訂正はあるか、なんの注釈もほどこしていないからだ。

「老残遊記」の英訳についてのべるばあい、書名を羅列するだけでは、説明したことにはならない。「老残遊記」成立自体に複雑な経緯がある。その状況を訳者がどれくらい把握しているかによって、原作の翻訳箇所がちがうものが出版されている。英訳の内容を検討しなければ、理解できない。それに関係して、訳者の解説が妥当かどうか、という問題も発生するのである。

本稿の主題は、「老残遊記」を英訳した訳者たちが、原作の成立過程をどれくらい知っているかを明らかにすることだ。必然的に「老残遊記」の成立について説明

することになる。あわせて、英訳にまつわる事情もできるだけ紹介することにしよう。

英訳「老残遊記」を記録する文献は、清末小説研究会編「劉鉄雲研究資料目録」(『清末小説研究』第1号1977.10.1)がある。書名をあげるだけだが、まとまったものとしては早いものだ。出版年からいえば、TIEN-YI LI(李田意)“CHINESE FICTION: A BIBLIOGRAPHY OF BOOKS AND ARTICLES IN CHINESE AND ENGLISH(中国小説研究論著目録)”(YALE UNIVERSITY, CONNECTICUT, 1968)、王爾敏編『中国文献西訳書目(A Bibliography of Western Translations of Chinese Works)』(台湾商務印書館1975.11)が先行する。しかし、私は、ずっとのちに入手した。また、「《老残遊記》版本簡介」(劉徳隆、朱禧、劉徳平著『劉鶚小伝』天津人民出版社1987.8所収)もある。最近のものとしては、郭延礼「《老残遊記》在国外 為《老残遊記》発表百周年而作」(『中華読書報』2003.5.21。同文を複数のウェブサイトで見ただが、やや詳しい。ただし、いくつかの英訳書名を列挙するだけだ。しかも、勘違いが見られる。同一訳本を別訳のようにあつかっていたりする。英訳原本を見ることが中国ではむづかしいのかもしれない。それにしても、間違いを訂正する研究者がいないのは問題だと考える。

当時の英訳者は、「老残遊記」についてそれほど詳しく知っているわけではない。昔は、時代の制約があったから無理もないと思う。研究資料が不足していたということも可能だ。一方、中国文学研究者は、英文にはもともと無関心である。そのふたつを背景にして現在の英訳『老残遊記』重版がある。

私の知る限りという前提はあるが、できるだけ英訳の原本を集める。その最初から現在にいたるまでに発表された英訳の主として解説部分について検討したい。各英訳題名につづけて原作の翻訳箇所と使用バージョンを表示しておく。

## 2 最初の英訳

### ウェイリー訳文

“THE SINGING GIRL” Liu T ieh-yün Arthur Waley, *ASZA* Vol.29, 1929.11

翻訳箇所：初集第2回部分

使用バージョン：亜東図書館本(1925.12初版未見/1934.10第十版。以下同じ)

ウェイリー Arthur Waley (1889-1966) は、英国の日本文学、中国文学の研究者。

## THE SINGING-GIRL

BY LIU T'IEH-YÜN

Translated from the Chinese by Arthur Waley



stricter parents regarded as very "rough." One well-brought-up boy (Lo Chen-yü, now a famous archeologist), destined later to become Liu's greatest friend, was so keenly alive to the perils of keeping bad company that, "whenever he heard Liu's footfall in the street, he ran as fast as his legs would carry him."

Soon, however, Liu settled down, worked hard at his books and was regarded as a reformed character. But there persisted in him (to his undoing, as we shall see) a curiously reckless indifference to the impression which his conduct made upon the rest of humanity.

After various false starts he went into business at Shanghai and lost everything. In 1888 there was a breach in the banks of the Yellow River at Cheng-chou. Liu had for some time been studying the history of such perennial disasters, and he now submitted to Wu Ta-ch'eng, the governor of the province, a plan for dealing with the inundation. This Wu Ta-ch'eng, it may be mentioned, is that same archeologist whose book on jade is so often quoted by Berthold Laufer and other western writers.

Liu was invited to give his assistance on the spot, and, by working up to his waist in water for days on end, he proved that his interest in such matters was not merely theoretical. The operations from time to time involved actual risk of life, and on such occasions it was always Liu himself who volunteered.

In 1898 occurred an event of extreme importance for Chinese archeology. In the north of Honan were discovered some objects in bone, tortoise-shell, ivory and so forth, bearing peculiar inscriptions. Liu at once recognized their impor-

LIU T'IEH-YÜN (like most Chinese he used a variety of pseudonyms, of which *T'ieh-yün*—"Iron Cloud"—is the one by which he is best known) was born about 1856. He came of a good family but as a boy ran wild and spent most of his time with companions whom

tance and in 1900 purchased the whole of the original collection. In 1903 he produced an album containing photographs of rubbings made from these inscriptions. Thus the attention of scholars was drawn to what proved to be by far the oldest surviving monuments of the Chinese language.

About the time of the Honan finds Liu began studying the question of railways. The European powers were at that time willing to construct them on terms very advantageous to China. Liu pointed out that, if foreigners were willing, in return for thirty or forty years' ownership of the lines, to cover the whole of China with a network of communications, it would be madness not to exploit such a situation. This led to his being accused of traitorous relations with the foreigners, a charge that was renewed during the Boxer rising of 1900-1901. There was something to give color to these accusations. Lo Chen-yü, in his memoir of Liu, without specifying what the nature of the employment was, admits that his friend was actually receiving a salary from Europeans, presumably as an agent in the matter of railway concessions.

Anti-European feeling was then at its zenith, and Liu's unpopularity was increased by the extravagant mode of living that he had recently adopted. After the Boxer rising a famine broke out in Peking. Liu not only devoted his own resources to the relief of the people, but with typical astuteness pointed out that the Russians, who had captured the imperial granaries, did not eat rice and would be willing to sell it at a very low price in order to use the space for flour. Again Liu was accused of conspiring with foreigners, and this time a definite case was brought against him by the authorities. It lingered on, and it was not, I think, till 1907 that he was found guilty and banished to Turkistan. He died there in 1910.

His preface to "The Wanderings of Lao Ts'an," the autobiographical novel from which the following extract is taken, bears the date 1906. This story, the scene of which is laid in Ch'i-nan Fu, the capital of Shantung Province, is his only essay in fiction; but, despite a very incompetent conclusion, it marks him as the most original writer of the pre-Revolution period.—*Introductory Note by the Translator.*

ASIA



Courtesy of New York Public Library  
From Chinese paintings made in the middle of the nineteenth century are reproduced these charming pictures of musical instruments, some of them much like those used by Po-niu and He-niu at their "drum-recitals"

日本の「源氏物語」、中国古典詩の英訳で有名だ\*1。

英訳「老残遊記」(部分)は、雑誌に掲載された。わずかに約2頁半と短い。おまけに冒頭1頁は、著者劉鉄雲についての説明が占める。

6枚の挿し絵が目を引き。6枚とも、ふたりの女性が豪華な絨毯を敷きつめた室内で楽器を奏でている図柄だ。髪を結び簪をさした服装の華麗さから、座っているのが女主人だろう。地味な服装でひつつめ髪を立てているのが下女という図式だ。歌姫という英訳表題から勝手に想像して描いたと思われる。あるいは、どこかにあったものを引用しただけかもしれない。

原作は、初集第2回の済南大明湖湖畔で催される語り物の場面だ。一般に「大明湖説書」とよばれる。といっても、英訳は全部ではない。街で名手白妞のうわさを聞き、老残はそれを実地に見聞することにした。妹の黒妞が歌う場面で、英訳の掲載はうち切られている。

英訳冒頭とそれに該当する原作部分(傍線は省略)を示そう。

AFTER crossing the Hsia-hua Bridge, Lao-ts' an walked slowly on towards Little Provincial Treasury Street. Suddenly something in the wall above him caught his eyes. He looked up. It was a small handbill on yellow paper - perhaps a foot by seven or eight inches. In the middle was written "Drum Recitation," that and no more. But on one side, in smaller letters: "At the Ming Lake site, on the twenty-fourth."

老残從鵲華橋往南緩緩向小布政司街走去，一抬頭，見那牆上貼了一張黃紙，有一尺長，七八寸寬的光景，居中写着『説鼓書』三個大字，旁邊一行小字是『二十四日明湖居』。老残は鵲華橋をとおつて南にむかい、小布政司街のほうへゆっくりと歩いていった。ふと頭をあげると、その壁に黄色い紙がはってあるのが見えた。長さ1尺、幅78寸で真ん中に「説鼓書」と大きく3文字が、そばに1行「二十四日明湖居」と書いてある。

英訳には、日本語訳をつけるまでもない。原作部分の訳を参照してほしい。英訳は、漢語原文を忠実に翻訳しているということが出来る。まず、この点を明記しておきたい。

固有名詞の翻訳は、むつかしい。鵲華橋は音訳した。だが、鵲の音は、hsia では



亜東図書館本

なく *chí üeh* (現在のピンイン表記では *que* の第4声) である。訳者の勘違いだと思う。

済南大明湖の南に藩署がある。地方の行政、軍政を司る役所で布政司ともいう。ここから南にのびる通りを布政司大街と称し、東西に走るのを布政司小街という。「老残遊記」では後者を指して小布政司街と書いている。ウェイリーはそれを Little Provincial Treasury Street (地方財務小路) と英訳したわけだ。

「説鼓書」は、民間芸能のひとつ。ふたり1組で演じる。太鼓(あるいは三弦、琵琶などもある)とカスタネットを伴奏に使用した謡いもの、語り物だ。「大鼓書」ともいう。

流暢な英訳である。ただ、あまりにも短い掲載に終わったのが惜しまれる。連載を予定していて中断したものか。単行本になっているとは聞かない。

ウェイリーは、劉鉄雲の経歴紹介に羅振玉の回想を使用している。ということは、胡適「老残遊記序」(亜東図書館本)に拠っていることが明らかだ。羅振玉の回想録に劉鉄雲の経歴を見いだしたのは、胡適がはじめてだから、それがわかる。

亜東図書館本が出る前は、初出の『繡像小説』も初版の天津日日新聞社本『老残遊記』も入手が困難であった。おまけに、『繡像小説』連載の本文には、編集者による改竄がある。敏感な読者ならば、それを見て天津日日新聞社本を読めば、内容が異なっていることに気づいただろう。どちらが正しい本文なのか判断がつかなか

ったはずだ。亜東図書館本ができる前にも『老残遊記』20回本は、勝手に発行されている。だが、劉鉄雲の経歴を紹介した文章を掲載する版本は、亜東図書館本が最初である。その意味で、貴重な版本だ。以後版数を重ねて、広く普及した理由でもある。

順番として初集20回の全訳が出てきてもいい。だが、不思議なことに、それよりも二集のほうが先になった。

### 3 二集の英訳

「老残遊記」二集は、最初『天津日日新聞』紙上で第9回までが連載された。1907年のことだ。だが、その後、埋もれたまま時間が経過した。二集が存在していることすら忘れられたのだ。その新聞切り抜き9回分が再発見されたのは、1929年になってからである。とりあえず、4回が雑誌に連載され、その後、2回を加えてつごう6回が単行本となった。ゆえに、二集は6回しかないと長く信じられた。実は、残る3回分は隠されたままその後ふたたび公表されなかったのだ。というわけで、単行本で流布した6回分が、林語堂によって英訳のうえ刊行された。

#### 林語堂訳本

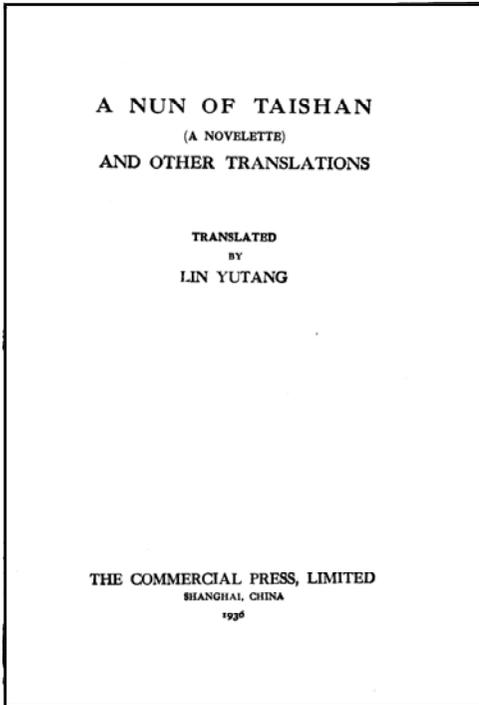
林語堂訳本は、2種類がある。しかも、主として二集の英訳であるのが目を引く。

“ A NUN OF TAISHAN ” Liu Eh, Lin Yutang, *A NUN OF TAISHAN AND OTHER TRANSLATIONS* The Commercial Press, Limited [ 商務印書館 ], Shanghai, 1936.10

翻訳箇所：二集6回。初集第2回部分

使用版本：二集は上海良友図書印刷公司本。初集はたぶん亜東図書館本

林語堂(1895-1976)は、上海の聖約翰大学を卒業後、北京の清華大学で教えたことがある。アメリカをへてヨーロッパに渡りドイツで言語学博士の学位を取得した。帰国し、清華大学、北京大学などで教授をつとめる。上海で雑誌『論語』『人間世』『宇宙風』などを創刊編集した。1936年渡米、主としてニューヨークに住む。晩年は台湾と香港に居住した。海外生活が長く、英語の著作を多くあらしめそれによって欧米でも有名だ。



1936年版



上海良友圖書印刷公司1936再版本表紙

林語堂の英訳は、なぜ「老殘遊記」二集6回なのか。

彼は、もともと「老殘遊記」を愛読していたという。知人に劉鉄雲の後裔がいた。その関係で、当時、再発見された二集を読むことができる（ただし、6回分だけだったようだ）。そこで、林がかかわっていた雑誌『人間世』\*2に、まず4回分を連載した。1934年のことだ。上述のように、これに2回分を加えて単行本化したのが『老殘遊記二集』（上海良友圖書印刷公司1935.3.1/1936.3.1再版）である。表紙には「劉鉄雲遺著、林語堂序」と印刷する。

このいきさつを知れば、林語堂に二集6回の英訳があってもおかしくはない。いうまでもなく、林にそれだけの英語力があったということでもある。

上記英訳本の書名を見て欲しい。『泰山の尼僧』であるのと同時に、「そのほかの翻訳」とも書かれている。そうなのだ。奥付には、英訳老殘遊記第二集及其他選訳／著訳者林語堂／上海・商務印書館、とある。原作者名として劉鶚の名前がないのは、そのほかに、老舎、老向（王向辰）、姚穎らの英訳文章を収録しているからだ\*3。

また、該書の後方に“A CHINESE GALLI-CURCI”を収録する。これは、初集第

2回の「大明湖説書」として知られている部分だ。「中国のガリ=クルチ」という題名になっている。ガリ=クルチは、イタリア出身のソプラノ歌手だ。ニューヨークで活動していたという。題名に使用するくらいだから、林語堂も聞いていたのかもしれない。

「序文」において劉鉄雲の経歴にふれて、新疆にて1919<sup>ママ</sup>年、五十三歳で死亡したと解説している。この1919年は1909年の誤り。『老残遊記二集』に収録された劉鉄孫の跋文に「宣統元年（一九一九）先祖五十三歳，……」と誤記してあるのを引用しただけ。

原文に存在する二集自序は英訳を省略した。

二集冒頭を見る。

It is said: /Laots'an (name of a tramp village doctor, meaning "Old Relic") was staying at an inn in Ch'ihohsien when he met Teh Hueisheng who was returning to his home at Yangchou with his family, and so they hired a mule cart for the long journey, and started off together. Early that morning, they crossed the Yellow River; the womenfolk were carried over in little sedan-chairs while the cart and mule were led gently across over the ice.

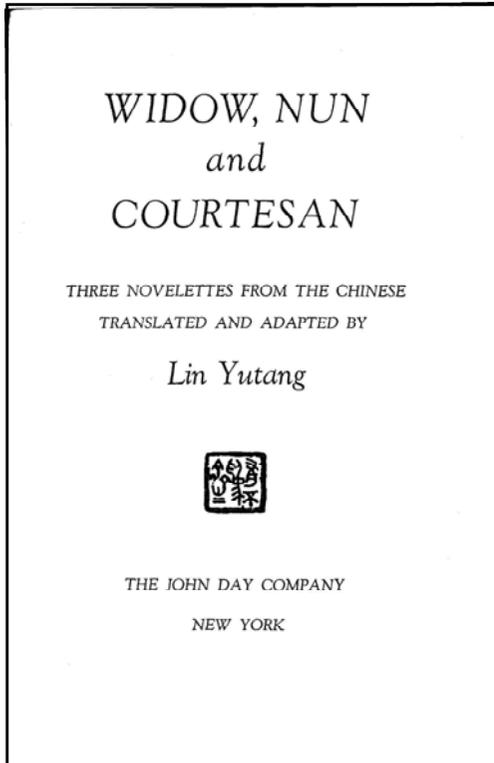
話説老残在齊河県店中，遇着德慧生携眷回揚州去，他便雇了長車，結伴一回起身。当日清早，過了黃河，眷口用小轎搭過去，車馬經從冰上扯過去。さて、老残は齊河県の宿で、德慧生が家族をつれて揚州に帰るのにであった。そこで彼は長距離用の車を雇って一緒に出発することにした。その日の早朝に、黃河を渡ったが、家族はカゴに乗って行き、車馬は氷の上を引っぱって渡った。

原文にそえた日本語訳を参照して英訳をご覧いただきたい。意味がはずれる箇所はないとわかるだろう。

英訳では、老残という名前を説明する必要があると判断したらしい。「放浪の村医者」の名前でその意味は「年老いた遺物」だという。もともとがそういう意味である。

後方に収録されている初集第2回「大明湖説書」部分を見よう。

No, this one is Dark Maid, Fair Maid's younger sister. She learned all her



ニューヨーク版

singing from Fair Maid... You could admire Dark Maid's singing and tell why you admire it, but you admire Fair Maid's singing without being able to tell why you admire it. Dark Maid's art can be imitated, but Fair Maid's art defies imitation.

不是；這人叫黑妞，是白妞的妹子。他的調門兒都是白妞教的；若比白妞，還不曉得差多遠呢！他的好処人說得出，白妞的好処人說不出。他的好処人學得到，白妞的好処人學不到。いいや、あれは黒妞とって白妞の妹だ。彼女の調子はみんな白妞が教えたものなんだ。白妞にくらべりゃ、まるっきりだめだね。彼女のうまさは人はいうことができるがね、白妞のうまさは言うことができない。彼女のうまさはマネができるが、白妞のうまさはマネできないね。

林語堂の訳文は、ウェイリーの英訳部分につながっている。あきらかに、林が意図的にそうしたものだ。

林語堂は、「若比白妞，還不曉得差多遠呢！」1カ所を省略しているが、なぜかはわからない。

ウェイリーは、白妞を Po-niu に、妹の黒妞を He-niu と訳した。林語堂は、そ

れを「白少女 Fair Maid」「黒少女 Dark Maid」にした。省略部分以外は、忠実な英訳となっている。

“A NUN OF TAISHAN” Liu O, Lin Yutang, *WIDOW, NUN AND COURTESAN THREE NOVELETTES FROM THE CHINESE* The John Day Company, New York [1950, 1951]

翻訳箇所：二集 6 回

使用版本：上海良友図書印刷公司本

「泰山の尼僧」という作品名は変わらない。だが、それを収録する『寡婦、尼僧および名妓』という書名全体が以前のものと異なっている。その理由は、そのほかの英訳作品が入れ替わったからだ。現代の王向辰、清末の劉鉄雲、古典の馮夢龍という3作品で構成されている。

「老残遊記」二集 6 回であることは、以前のものと同じだ。ただし、訳文には手が加えられており、ところどころに注釈をつけている。こちらには、初集第 2 回の「大明湖説書」は収録されていない。

\*老残遊記 (英漢対照 詳細注釈) 卷上10回 劉鉄雲 林語堂訳 梁迺治注釈  
上海・朔風書店1941.7 初序なし 無評

上海図書館で見た。詳しいことは思い出さない。手元がないから未見あつかいをする(\*印は未見の意味。以下同じ)。

以上は、初集第 2 回の部分であったり、二集 6 回であったり、いずれも初集20回とはちがう部分の英訳だった。つぎにようやく初集の全訳がでてくる。

#### 4 初集の英訳

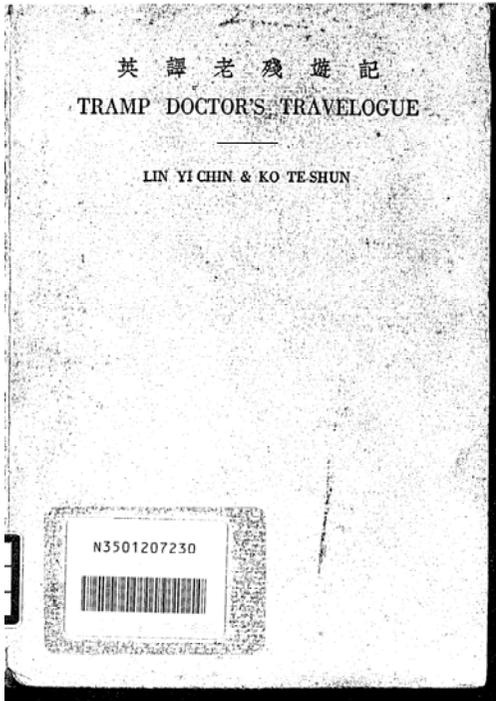
林疑今ら訳本

*TRAMP DOCTOR'S TRAVELOGUE* [表紙：英訳老残遊記] Liu Eh, Lin Yi-chin, Ko Te-shun, The Commercial Press. LTD [上海・商務印書館], Shanghai, 1939.6

翻訳箇所：初集20回

使用版本：亜東図書館本

扉には、翻訳者の肩書きをそれぞれ、林疑今 M.A., Columbia、葛徳順 B.A.,



1939年版

St. John's としている。序を書いた G.N.Ling 林玉霖は、Professor だ。

林疑今（1913—説1912-?）、上海東呉第二中学のころから翻訳を始める。上海聖約翰大学卒業後、アメリカのコロンビア大学大学院で英米文学を専攻した。林語堂は叔父になる。葛徳順の St. John's は、聖約翰大学だ。林と葛は同窓生らしい。

英文書名を日本語訳すれば「放浪医者旅行記」となる。初集20回が、はじめて全訳された。

林玉霖（四川大学教授）は、その序文で林語堂の英訳に触れている。

訳者ノートの冒頭で「新疆にて1919年、五十三歳で死亡した」と誤記するのは、林語堂の解説をそのまま受け入れたからだ。また、胡適の「老残遊記」に対する情熱をも称賛する

林疑今らの英訳をウェイリーが訳した該当部分にあわせて示す。

From Chiao-hua Bridge Lao-ts'an walked southward, and strolling along a main street he saw posted on the wall a piece of yellow paper about one foot by seven or eight inches in size. On the paper were written three big characters, "The Drum Ballad" and on the side were a line of small characters which read: "Bright-Lake Garden, the twenty-fourth day."

林疑今らも固有名詞で苦労をしている。4例を選択してウェイリー／林疑今ら、の順で見てみる。くりかえすのも手間だから、のちのシャディックの訳も後ろにかかげる。

鵲華橋 Hsia-hua Bridge / Chiao-hua Bridge / Magpie Bridge  
小布政司街 Little Provincial Treasury Street / a main street / Treasury Street  
説鼓書 Drum Recitation / The Drum Ballad / Recital of Drum Tales  
二十四日明湖居 At the Ming Lake site, on the twenty-fourth / Bright-Lake Garden, the twenty-fourth day / On the Twenty-fourth at the Ming Lake House

「鵲」の中国音表記については、すでに述べた。別の表記では ts'io がある。chiao はそれとも異なる。シャディックはカササギの英訳を使用した。小布政司街は大通りではないから、林疑今ら訳は誤解をまねく。といっても、重要な箇所ではない。大通りでもかまわない。

もうひとつ比較する意味で、林語堂の第2回部分に該当する個所を林疑今らの英訳で示す。

She is the Black Lassie, the younger sister of the White Lass. She was taught vocal by her sister and her technique was far inferior. One can always describe and sometimes imitate her, but no one can do the same to her sister's.

林語堂は、「白少女 Fair Maid」「黒少女 Dark Maid」と訳し（シャディックもそれを踏襲）、林疑今らは White Lass、Black Lassie とした。同じ意味だが、表現を変える努力をしている。また、漢語原作に忠実であるよりも、英語の流れを重視した翻訳となっている。

使用版本は、特定がむつかしい。亜東図書館本とそれ以外（商務印書館本系と称する）のふたつの可能性がある。両者のわずかな違いのひとつは、老残が会う宮保の名前だ。第3、4回および第6、7回に出現する。商務本系は張と莊の2種類を使用し不統一である。それに気づいた亜東本は莊で統一する。実在の人物張曜をモデルにしているが、劉鉄雲自身がうっかりして統一しそこなったのだ。

林疑今らの訳本を見る。His Excellency (第3回)、the governor (第4回)、Governor Chuang (第6、7回)とある。この Chuang が宮保の姓「莊」と重なる。「張」であれば、Chang と書くはずだからだ。故に、使用版本は亜東図書館本である。出版元は商務印書館だが、それとは関係がない。

「老残遊記」初集20回の英訳は、もう1種類が出ている。

#### 楊夫妻訳本

楊憲益 (1915-) は、英国オックスフォード大学に学んだ。1940年帰国し、夫人のテイラー Gladys M. Tayler と合訳した「儒林外史」など多数発表している。翻訳者としてきわめて著名であるといえる。1996年当時、彼は、英国籍の夫人(中国名戴乃迭)と北京の友誼賓館に暮らしていた、と実際に面会した人が書いている\*4。

楊夫妻訳「老残遊記」は、部分発表を含めると少なくとも4種類以上はある。

郭延礼は、「接着又有楊憲益、戴乃迭夫婦的《老残遊記》訳本(1947年南京独立出版公司出版)問世, 1948年, 這個訳本又由倫敦的阿蘭及岸温有限公司出版。80年代, 外文局出版“熊猫叢書”介紹中国文学, 《老残遊記》用的就是楊訳本」\*5と書いている。最初に南京から刊行され、つづいてロンドンの出版社から、1980年代に「パンダ叢書」に衣替えをした。これでは3種類で、私がいいう4種類には足りない。後にのべる。

\*MR. *DECADENT* Liu Ngo, H.Y. Yang and G.M. Tayler, Nanking 1947

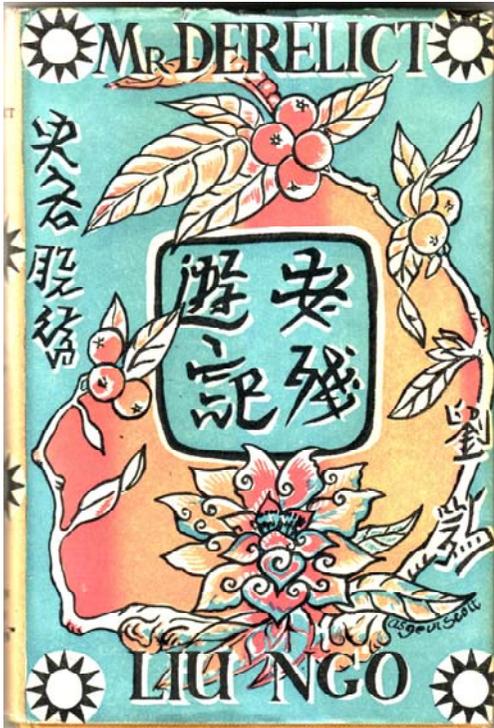
書名は、「頹廢者」という意味だ。私は、南京で刊行された該本を見ていない。英訳書名を改題しロンドンで出版された次の版本から紹介しよう。

MR. *DERELICT* Liu Ngo, H.Y. Yang and G.M. Tayler, George Allen & Unwin Ltd, London, 1948

翻訳箇所：初集12回

使用版本：商務印書館本系

南京で初版が発行され、それが1年後には、すぐさま英国で出た(以後、本書をロンドン版と称する)。それだけ有力な英訳だと判断されたためかと思う。こちらは、書名を日本語で示せば「放浪者」になる。南京版とロンドン版は、英語が同じ頭文字だからまぎらわしい。



1948年ロンドン版

使用版本は、亜東図書館本ではない。第3、7回の宮保を Governor Chang と訳しているからだ。「張」である。だから、商務印書館本系とした。

その「前言」において劉鉄雲の経歴を詳細に述べる。胡適の「老残遊記序」に依拠している。

この楊夫妻訳本が奇妙なのは、初集は本来20回あるにもかかわらず、12回しか英訳していないことだ。

楊憲益自身が「前言」で次のように説明している。

「老残遊記」は、完結しなかった、しかも、本書のある特定の部分は劉鶚によって書かれたものではないと多くの人々が信じている。本翻訳では削除している第9、10回および第11回は、天津の新聞に最初連載された時、編集者によって改変されたと著者の曾孫が述べている。それらの回では、きたるべき事件の予言、しかものちに部分的に実現していることを主としてあつかっている。しかし、それらはほとんど確実に改竄を含んでおり、その調子が本書の残りの部分とは一致していないため、本翻訳にはそれらを収録していない。私たちは、おなじく第18、19回および第20回的一部分も削除した。なぜなら、超自然の大

きな要素がある殺人事件をあつかっており、原書の最初部分の現実主義とは明らかに異質であるからだ。その部分は著者の息子によって書かれ、合間の出来事として挿入された、と少なくとも、ある原書の「序言」が言明している。12頁

楊がここで言及している著者の曾孫というのは、劉鉄孫を指す。前述『老残遊記二集』に「劉鉄孫跋」が掲載されているのがそれだ。鉄孫は、以下のように書いている。楊の説明と対比するために訳出する。

「老残遊記」正集20回続集6回は、最初『天津日日新聞』に毎日発表された。先祖（注：劉鉄雲）の原稿は北京から送られてきた。当時、父（注：大縉）は新聞社で校閲の仕事をしていた。聞くところによると「正集第11回には革命を論じる部分がある。先祖の原文は「易経」革卦の象辞（注：解説）を引用して「天地は革（あらた）まることにより朝夕昼夜また四季を成立させる。殷の湯王、周の武王は天の命を革めることによって、天道に従い人心に応じることができたのである」というものだった。革命に賛成するという意味であり、その上半分で説明していたのは、数十年後に文明が結実し大同に至るのが一気に実現するというものだったのだ。当時、編集者は発表する勇気がなく、「沢火革、二女同居して、其志相得ず」との象辞に改めた。しかも部分的に書き加えて原著の考えとは大きく異なってしまったのである」という。7頁

楊憲益と劉鉄孫の説明を比較対照してもらえれば、すぐに理解されるだろう。楊は、鉄孫の書く「老残遊記」の成立経過をそのまま受け入れたのだ。ところが、これが間違いだらけ。

「老残遊記」が最初連載されたのは、上海の商務印書館が発行する『繡像小説』誌上である。まず、この事実を劉鉄孫は、知らない。

経緯は、こうだ。『繡像小説』の編集者（李伯元にほかならない）が、「老残遊記」第11回の原稿を勝手に没書にした。その前後部分を改作し、すでに手渡されていた原稿第14回までを1回ずつくりあげて雑誌に掲載した。それで連載は実質上中断となる。つまり、『繡像小説』誌上では、表面上第13回までの連載で終わっている。

その後、天津日日新聞社社長の方葯雨が劉鉄雲の友人だったところから、鉄雲は

続作を勧められる。劉鉄雲は、第1回からあらためて『天津日日新聞』に連載を開始した。没書になった第11回は、手元においていた原稿の控えにもとづいて復元する。また、第15回より新しく書き足して第20回までを完成した。これが初集20回である。

ゆえに、最初『天津日日新聞』に連載された、と鉄孫が書くのは間違い。かさねていえば、原稿ボツ事件は『繡像小説』の編集者が引き起こしたのだ。改竄をしたのが天津日日新聞社の編集者になってしまうのにはあきれられる。しかも、劉鉄雲が革命に賛成していたとは、まったくの逆である。彼は、北の義和団、南の革命党のふたつとも反対していた。だが、1930年代の中国では、劉鉄雲が革命に賛成していたということに鉄孫はしつかった。鉄孫は虚偽の証言を書き残したのだ。

おまけに二集は、もともと9回が『天津日日新聞』に公表されていた。それへの言及もない。

たとえ著者の親戚であろうとも、知らない人は何も知らない。原稿を公表出版するために、出版社が鉄孫に文章を書かせたのだろうが、明らかに失敗であった。だが、当時の出版関係者は、そんなこととは認識しなかった。間違い文章がそのまま公表されたのだ。

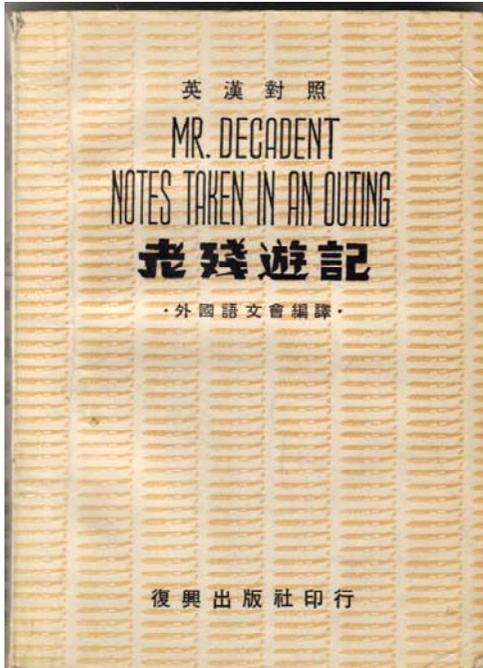
親戚も加担して劉鉄雲と「老残遊記」について謬見誤伝をまきちらしていた。それを訂正する目的で、劉大紳「關於老残遊記」(署名は紳『文苑』第1輯1939.4.15。のち『宇宙風乙刊』第20-24期1940.1.15-5.1に再掲載)が書かれたのである。

劉大紳は、鉄雲の息子だ。父親とその作品「老残遊記」に関して、多くの誤解が社会に広まったままであるのががまんができなかった。大紳の説明を読めば、鉄孫が書いているような風説がすべて間違いであることが理解できるようになっている。

楊夫妻の英訳は、初版が1947年に出ている。劉大紳の重要論文を読む機会は、時間的にいって十分あったはずだ。だが、楊憲益は、この重要な劉大紳論文を目にしていなるとわかる。なぜならば、鉄孫の証言を信じ込んでしまい、自らが説明しているように原文を大幅に削除しているからだ。

楊のことばによれば、削除したのは第9-11回および第18-20回という。6回分を削除したのであれば、14回の英訳ということになる。簡単な引き算だ。ところが、英訳は12回分でしかない。

楊夫妻の英訳を実際に見ると、第9-11回、第18-20回のほかに、第16、17回の2回分も削除している。そればかりか、前後のつじつまをあわせるために自分たちで



香港再版

作文までしている。原文にあるはずのないものを英語でつけ加えるのだ。これでは、翻訳という行為を大きく逸脱しているといわなければならない。

「老殘遊記」の成立について正しく認識していない。誤った知識にもとづき、原文のいくつかを削除し、さらには訳者の創作をつけ加えている。これは、翻訳以前の問題である。評価の対象とする価値もない。

翻訳で著名な楊夫妻であるが、英訳「老殘遊記」については、大きな汚点を残したと書くのは、本当に残念だ。しかも、それを指摘する中国の専門家がないというのも私にとっては驚きである。

郭延礼は、前述のようにロンドン版を紹介する。そののち、「在英訳本中，還有 H.Y.揚徳、G.M.泰勒合訳的《老殘先生》(Mr. Derelict)，系節訳本，1948年喬治・愛倫和恩文有限公司出版」とあたかも別の版本があるかのように書いている。誤解だ。ロンドン版のジョージ・アレンとアンウィン社本にほかならない。

*MR. DECADENT NOTES TAKEN IN AN OUTING* (英漢對照 老殘遊記) 外國語文會編訳 香港・復興出版社1968.11再版

書名とともに老殘を MR. DECADENT と表記する。初版にもとづいて復刻し、さらに漢語原文を添えた版本だとわかる。本文は、ロンドン版と同一だ。楊夫妻が

英訳に際して書き換えた部分は、あらたに漢訳をしている。

「序文」は、ロンドン版と同じだが、最後部分に林語堂英訳の二集について説明を加えている。はたして、これが初版のままなのか、それとも香港で書き加えたのか、初版をみていないからどちらとも判断をしかねる。

本書には、別版があるという。独立出版社1952ということは、香港で影印したもののか。こちらは未見だ。

英訳初版の1947年から数えて35年後、中国北京で楊夫妻訳本を再版する計画が持ち上がった。出版に先立ち、前言と英訳の一部が雑誌に発表された。郭延礼が触れなかったものだ。

“Selections from “The Travels of Lao Can”” Liu E Yang Xianyi and Gladys Yang *Chinese Literature* 1982 no.12

翻訳箇所：初集第1-3回

使用版本：商務印書館本系

楊夫妻訳は、「パンダ叢書」として新たに出版することが決まっていたのだろう。それに先立ち部分的に公表された。よくあることだ。

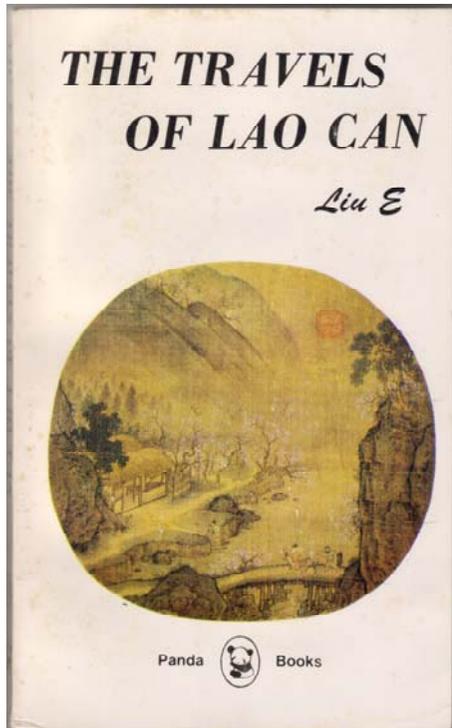
以前の英訳本と異なるのは、まず書名を上記のように変更した。すなわち、*MR. DECADENT* あるいは *MR. DERELICT* を *The Travels of Lao Can* に改めている。劉鶯の英語表記 Liu Ngo をピンイン表記の Liu E に直す。翻訳者名を含めて文中の固有名詞は、すべてピンイン表記に改めたということだ。語句を変更しているのは、ごくわずかにすぎない。ほとんど、手を入れていないといってもいい。

元版の“PREFACE”は“On “The Travels of Lao Can””に改題された（本稿では楊解説文ということにする）。雑誌用にそうしただけ。執筆者は楊憲益だ。

語句の変更例を見よう。で書き換えを示す。たとえば、the Boxer Rising the Yi He Tuan Uprising\*(p.81)とする。\*印は注だ。The Boxer Uprising. 義和団を意味する。

前に引用した箇所の冒頭に Unfortunately (不幸なことに)を追加する。

この楊解説文で注意しなければならないのは、のちに「パンダ叢書」に「前言」として収録するものと最後部分が異なっていることだ。わずかに、「残念ながら小説は、完結しなかった、しかも、本書のある特定の部分は劉鶯によって書かれたものではないと多くの人々が信じている」という箇所を残すのみ。問題の、削除した



パンダ叢書版

回に関する楊の解説を、すっかり、削除する。

その処置は、わからないでもない。楊解説文は、あくまでも雑誌に収録した「老残遊記」初集第1-3回の説明としての役割しかはたしていない。単行本では削除する回があるからこそ必要になる説明だ。だから、雑誌掲載時にはよけいだ、と編集者に判断されたものだろう。

楊解説文は、漢訳された。楊憲益著、劉徳平訳「關於《老残遊記》」\*6である。

説明によると、訳者は、直接、楊に漢訳文を見てもらっている。その時の手紙に、このたび「パンダ叢書」に収録される、云々と書いているらしい。残念ながら、劉徳平は該叢書収録の「前言」までは確認しなかったようだ。あるいは、資料集の出版には間に合わなかったのかもしれない。最後部分が違っているという注記を書くことができなかった。

「パンダ叢書」に収められた楊夫妻訳本は、日本でいえば新書判である。

*THE TRAVELS OF LAO TS'AN* Liu E Yang Xianyi, Gladys Yang, Chinese Literature, Beijing, 1983

奥付の表示は、老残遊記、劉<sup>ママ</sup>顥、熊猫叢書、《中国文学》雑誌社出版1983年とな

っている。裏表紙に劉鉄雲の顔写真を掲載する。

「前言」には、初版以来説明をしている削除部分についての記述がある。

楊夫妻が1940年代の知識で、独自に判断して削除した少なくない部分があったことには、すでに触れた。

くりかえせば、原文第9-11回、第18-20回のほかに、第16、17回の2回分も削除した。前後のつじつまをあわせるために自分たちで作文もしたのだ。

重版なのだから、削除部分は以前と同じだ。「前言」には、その削除した箇所として新たに第16回を加える。だが、削除した第17回には触れない。最後部分を少し書き換えている。ということは、1983年に重版するとき、楊憲益は、「前言」を訂正する機会があったことを意味する。しかし、あくまでも40年近く前の解説にこだわった。劉大紳論文は、ついに楊の目にはいらなかった。そういう文献があることを助言する出版社の編集者もいなかったということだ。

さて、次は、本稿冒頭で触れたシャディック訳本である。

#### シャディック訳本

ハロルド・シャディック Harold Ernest Shadick (1902-?) は、アメリカ人(一説カナダ人)。アメリカに生まれ、一家でカナダに移住した。トロント大学卒。1925年より北京の燕京大学において西洋史と西洋文学を教えた。蕭乾も彼の学生のひとりだ。1929年、小説「老残遊記」に出会い、1934年頃から英訳を考えていた。ある時、北京発天津行きの列車のなかで胡適と偶然隣りあわせになった。シャディックが使用していた版本の編集をしたのが胡適だ。すなわち亜東図書館本である。胡適は「老残遊記」の著者について彼に話し、英訳するのを励ました。20年後、シャディックがコーネル大学で教鞭をとりながら「老残遊記」の英訳を該大学出版局から刊行できたのも胡適の応援があったからだ、と彼は信じている。胡適は、コーネル大学の卒業生だった。中国に住んでいた1936年8月、済南を訪問し「老残遊記」の舞台を実地に確かめた。大明湖などの写真とともに自らの英訳書に収めているからよく知られている。その頃のことだ。劉蕙孫と呉世昌の紹介で劉大紳と北京で面会し写真を残した(これも英訳『老残遊記』に収録される)。日中戦争で日本軍に身柄を拘束され、1949年ころアメリカに帰国した、と蕭乾は考えているらしい。だが、コーネル大学図書館の資料によると、1946年から1971年まで、該大学中国文学の教授をつとめている。こちらの方が正確だろう。1980年、蕭乾が訪米したとき会った。

1992年、謝冰心が蕭乾にあてた手紙のなかで、シャディックは90歳で結婚したと書いている\*7。

私が大学を出たあと、1970年代のことだ。「老残遊記」について調べていてアメリカ在住のシャディック氏に質問の手紙を書いたことがある。その返事は、今は古典を主として研究しているので「老残遊記」については言うことがない、という内容だったように記憶している。

シャディック訳本は、大きくわけて2種類がある。初版とそれを影印したもの、および本文を組み直し漢語原文と対照した最近の2冊本である。2種類といっても内容に変わりはない。

初版出版は1952年だ。しかし、その翻訳の過程を見れば、シャディック訳本は、本来は楊夫妻訳本よりもはるか以前に刊行されていてもおかしくはなかった。さかのぼって1930年代出版の可能性もあったのである。

英訳本を紹介する前に、シャディックの論文から説明することにしよう。論文は、2本ある。

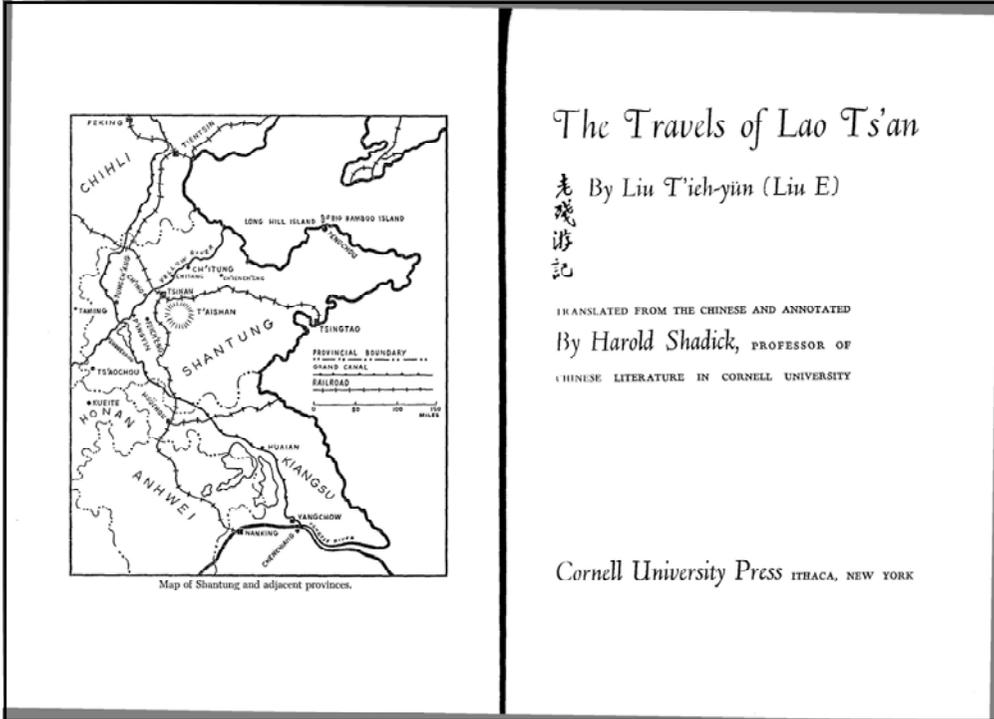
最初の論文は、H. E. Shadick作、杜陽春訳「A Foreigner's <sup>ママ</sup>Impression of the Lao Ts'an Yiu Chi 一個外国人对老残遊記的印象」(『文苑』第1輯1939.4.15)という。

すでにお気づきのことと思う。シャディック論文は、劉大紳「關於老残遊記」と同時に同じ雑誌に発表された。ただし、見ることができるのは漢訳だけ。もとの英文論文が、別に発表されたかどうかはわからない。

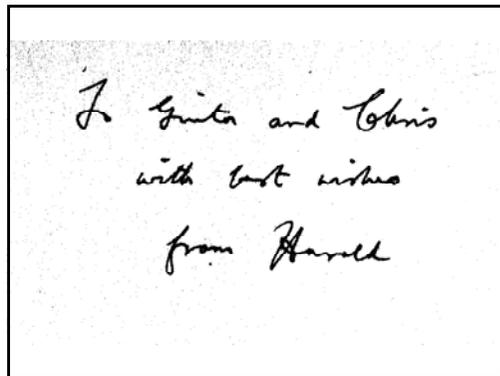
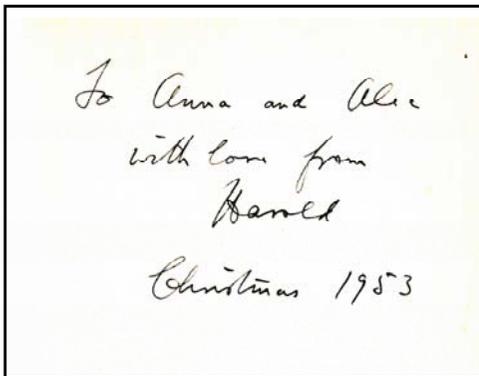
論文が発表された背景に触れておく。再発見の「老残遊記二集」が雑誌『人間世』に連載されたのが1934年のことだった。単行本になるのがその翌年1935年だ。二集の出現に中国文芸界が大いに驚いたころ、シャディックは北京で「老残遊記」初集の英訳作業を続けていた。劉大紳に紹介され、劉鉄雲に関する資料の援助も受けている。前述済南旅行にもでかけた。

というわけで、論文の内容といえば、「老残遊記」についての感想だ。外国人が興味あると感じる箇所を引用しながら、作者劉鉄雲の経歴も少し説明する。表題通りの内容である。

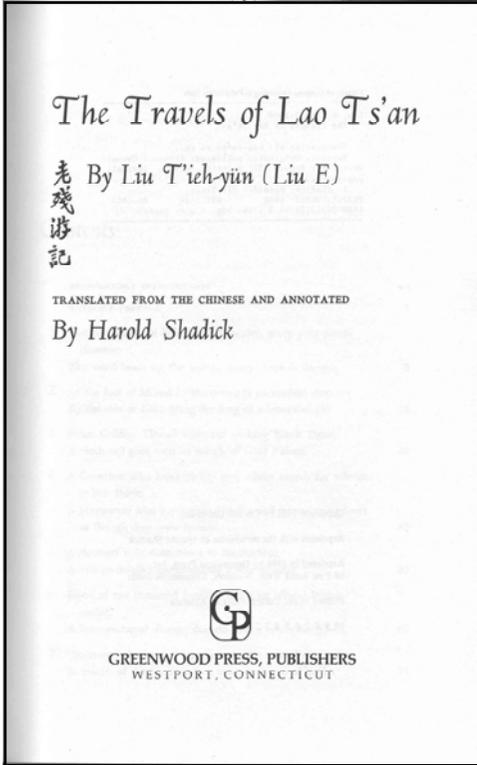
シャディックは、自分の経験をわずかだが論文に挿入している。たとえば、英訳が今年中に出版されるかもしれない、と書く。ここでいう「今年中」というのは、文章が掲載された1939年である。翻訳はすでに完成していた。のちに、シャディック自身がそうのべている。だが、出版は実現しなかった。大きく後れて1952年にな



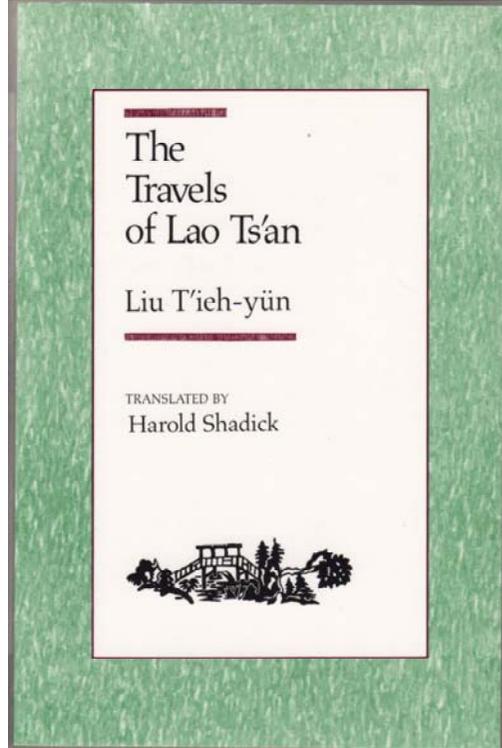
1952年初版扉



1952年初版2冊 シャディック署名



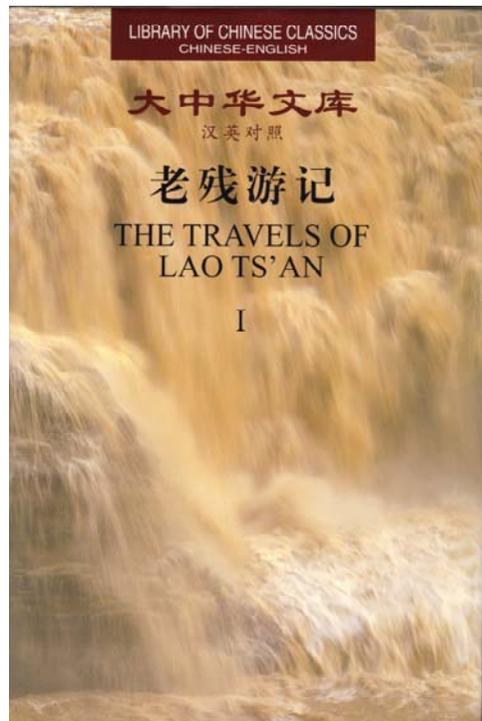
1986年グリーンウッド版



1990年モーニングサイド版



海賊版



2005年大中華文庫版

るまで待たねばならなかった。当時の状況を考える。林疑今らの訳本が出たのが、1939年6月のことだった。そちらに一歩先をこされた。「老残遊記」に2種類の英訳は必要がない、と出版社に見られたのではなかろうか。

また、彼は、済南を参観したのは1936年だと書いている。前にのべた通り、のちに刊行された英訳「老残遊記」に収録されているのは、その時にとった写真だった。

劉大紳「關於老残遊記」は、のち『宇宙風乙刊』第20-24期(1940.1.15-5.1)に再掲載された。そのとき、シャディックの上記論文も訳者を変更して、再度、翻訳されている。H. E. Shadick(謝迪克)作、柳存仁訳「西洋文人對於老残遊記的印象」(『宇宙風乙刊』第21期1940.2.1)がそれだ。柳存仁は、訳文に回目をあらたに添える工夫をしている。

もうひとつの論文は、Harold Shadick “The Travels of Lao Ts'an : A Social Novel”(THE YENCHING JOURNAL OF SOCIAL STUDIES vol.2 no.1 北京1939.7)である。

清末小説の流行から説きおこし、劉鉄雲の経歴を詳しく紹介する。太谷学派について言及している箇所、「老残遊記」を書くことになったいきさつなどなど、多くの部分は、すべて劉大紳の文章を下敷きにしている。いずれも大紳がはじめて明らかにした事実だ。

事実、注11(43頁)において、「老残遊記」を英訳していることを聞いた劉大紳が、劉鉄雲についての原稿を提供してくれたこと、その原稿は『文苑』第1輯に掲載された、と説明している。

該論文は、のちに出版する英訳「老残遊記」の前言としてほとんどそのままが利用された。

問題箇所については、その前言において説明する。

*THE TRAVEL OF LAO TS'AN* Liu T'ieh-Yün(Liu E)、Harold Shadick, Cornell University Press, Ithaca, New York, 1952/1966

影印本 Greenwood Press.Inc., Connecticut, 1986

影印本 Columbia University Press, Morningside Edition, New York, 1990

“Translator's Introduction to the Morningside Edition”

影印本 台湾・文星書店 刊年不記

翻訳箇所：初集20回

使用版本：亜東図書館本

以上のほかにも刊行されているかもしれない。海賊版については、刊年不記の台湾本以外はよくわからない。

ここに掲げた初版本には、シャディックの署名 Harold がある（複数所蔵するものうち2冊）。1966年再版本も、本文、写真、ページ数などまったく同じだ。しいて違う点をのべれば、初版本の大きさをひとまわり小さくしたのが再版本だ。その理由は、本文まわりの空白を詰めたためによる。

のちの版本も影印本だから、本文の内容は同じであることはいうまでもない。ただし、重版して出版社が異なれば、その部分の表示が違ってくるのは当然だ。それ以外といえば、その扉にわずかな異同が見られる。シャディックの肩書きである。

初版、再版では、TRANSLATED FROM THE CHINESE AND ANNOTATED /By Harold Shadick, PROFESSOR OF /CHINESE LITERATURE IN CORNELL UNIVERSITY とある。

1986年のグリーンウッド版以降は、シャディックの PROFESSOR 以下コーネル大学教授部分が外れる。1972年に大学を退職したからだろう。

該書は、山東省地図、扉、目次、訳者前言、初集自序、本文20回、注、附録、語彙解説、中国語音表記という構成になっている。

もうひとつ、モーニングサイド版（1990）だけは、さらに少しの違いがある。

モーニングサイド版訳者前言が新しく書かれている。上述した列車で胡適と乗りあわせた、などの思い出がはじめてここで披露された。また、山東地図の掲載場所が、移動している。訳文に使用した中国音の表記方法は、ウエイド、ジャイル式だった。1990年に影印するにあたり、ピンイン式との対照表を2頁ふやした。それで前言部分のページが増加している。違いといえば、それくらいのこと。それ以外は、影印本だから全277頁が完全に一致する。

15-22頁は、写真12枚のページだ。「老残遊記」外編原稿は珍しい。劉大紳が保存していた。それを見せてもらったから写真を掲げている。1930年代に撮影したものだ。だが、本文が活字に起こされて公表されるのは、1960年代まで待たねばならなかった。掲載したのは、魏紹昌編『老残遊記資料』（北京・中華書局1962.4。采華書林影印あり）である。一方、原稿の全部は、2004年、日本においてその複写が刊行された（樽本編『老残遊記資料』清末小説研究会2004.2.1）。人物の集合写真は、劉大紳の家で撮影されたと考えられる。左からシャディック、呉世昌、劉蕙孫、ヘレン・

シャディック、女の子、劉大紳夫人、劉大紳である。あとは済南と黄河などの風景だ。

前言について検討する\*8。

胡適「五十年来中国之文学」を引用して当時の文学状況について説明することからはじめている。劉鉄雲の生涯を詳細に紹介し、その著作である「老残遊記」、劉鉄雲の道德観、政治観、「老残遊記」の文学的特徴、翻訳などを解説する。

私が本稿で問題にしている「老残遊記」成立の状況をシャディックは、どのように把握しているだろうか。

彼には、劉大紳の文章を利用できる有利な事情があった。それ以前の翻訳者にはそれができなかったから、「老残遊記」に関するシャディックの知識は、格段に豊富である。ただし、劉大紳論文を利用できただけ、それに影響されて誤解も生じることになった。

たとえば、「老残遊記」第8回にでてくる虎だ。『繡像小説』に連載中、第8回の原稿は狐だったのを編集者が虎に書き換えたというものだ。劉大紳がそう証言している。だが、その後の版本も、著者が訂正できたにもかかわらず虎のまま。ゆえに、もともと虎であったし、前後の話の流れからしても虎であるほうが適当である。これは劉大紳の勘違いだ、というのが従来からの私の見方である。

その第8回の書き換えがあったから原稿を仲介した連夢青の怒りをかい、連載が中止になったと彼は書く(14頁)。間違い。『繡像小説』の連載を中止した原因は、原稿第11回が編集者によって没書にされたからだ。

シャディックの文章は、劉鉄雲と「老残遊記」を紹介してかなり精密である。だからこそ、次のような彼の説明を読むと私は違和感をおぼえるのだ。

この小説の多くの正当な版本は、ここに訳出したように20回だけである。しかし、全部で34回が『天津日日新聞』に掲載された。劉家では元の印刷物1組 [a set of the original printed sheets] を保存しているが、残念なことに最後の6回は失われてしまった。1935年、林語堂が劉家の人間から第21回から第26回 [注22] の本文を入手し、「老残遊記二集」という名前で発表した。1936年、上海の商務印書館が「泰山の尼僧」という題名で彼の英訳を出版したのである。彼は、その修正版を『寡婦、尼僧および名妓』(ニューヨーク1961)に収録した。

17頁

[注22] 劉家では27、28回および29回の一部の複写 [a copy of chapters XXVII, XXVIII and part of XXIX] を所有している。しかし、それらは復刻されたことはない。第29-34回の複写が将来日の目を見ることがあるのか興味深い。235頁

重要な箇所には英語原文を示して訳した。

全34回が『天津日日新聞』に掲載されたというのは、どういうことか。さらには、最後の6回が失われているともいう。

まず、34回という表記にとまどう。ここでいう「とまどう」とは、一般にはそのように呼ばないからだ。二集は続編とはいえ、呼称と回数は独立させているから二集第1回のように数える。第21回とはいわない。

初集が20回だから、シャディックのいう全34回というのは、引き算して14回が二集ということだ。

その最後の6回がないのであれば、現存する二集は8回ということになる。だが、9回あるのが事実だ。数字があわない。

数字の齟齬が生じた理由は、劉大紳が「今わずかに8巻があるだけだ [今僅存八巻]」\*9と書いているのにシャディックは全面的に依拠したからである。

整理し直す。初集は20回ある。間違いはない。一方、二集は14回だという。そのうち単行本になったのは6回分で、第7-9回の複写が現存している。ということは、最後の5回分(6回分ではない)が失われた、とシャディックは言いたいらしい。

二集の『天津日日新聞』掲載について説明する時も、シャディックは劉大紳の文章を利用した。それしか頼る文献がないのだから、ほかに方法がない。

劉大紳は、二集14回が『天津日日新聞』に掲載されたと明言している。さらに、だめ押しのようにして、当時を回想して劉鉄雲は確かに14回を書いていた\*10、ともいうのだ。これをシャディックは、そのまま信じた。

だが、私が調査した結果、『天津日日新聞』に連載された二集は、第9回までしか存在しない。日本には、新聞の切り抜きを2冊にわけて綴じている原物が保存してある。二集14回までが連載されたとして、わざわざ9回だけを選択し残りを破棄したとは考えられない。思い出してほしい。1929年に再発見された新聞切り抜きの二集も、9回分であった。以上を総合すれば、二集は9回しか書かれなかったのだ。14回を書いていたと大神がいうのは、二集ではなく初集のことではないか。私は、そう考える。劉大紳の勘違いだろう。

ここで、英訳「老残遊記」から少しだけはずれる。二集の再発見のいきさつを復習しておきたい。新聞切り抜きの元版なのか、それとも筆写したものなのか問題になるからだ。拠る資料は、前出劉大紳「關於老残遊記」とそれにつけられた劉厚沢の注である。

再発見が1929年であることはすでに述べた。

天津日日新聞社で働いていた劉大経（大紳の弟）は、新聞から切り抜いた二集9回を探し当てた。それを大紳のもとに送った。大紳は、鉄雲の著作であることを確認する。保存のためということで息子の蕙孫と厚沢のふたりにその夜のうちに筆写して副本を作るように命じたのだ。もとの切り抜きは大経へ返却した。この時点で切り抜きとは別に筆写本ができたことになる。

その後、大経は切り抜きを所有したままで二集の出版を企画したが、大紳の反対で実現しなかった。1932年になり、大経は400円で上海の蟬廬書店の親戚羅子経へ売却する。子経（振常）は、羅振玉の弟。羅振玉は大紳の岳父になる。羅家とは親戚だ。大縉（大紳の兄）の長男鉄孫は売却話を聞き、もとの値段で買い戻した。それ以後、切り抜きは鉄孫の所有になった。林語堂が上海良友図書印刷公司本から出版した『老残遊記二集』に鉄孫の跋があるのは、そういう理由である。

1954年、鉄孫は死去し、彼が所有していた切り抜きは行方がわからなくなった。だから、劉厚沢と蕙孫兄弟が筆写した副本だけが存在しており、これが最も早い版本ということになる。以上が劉厚沢の証言である。

シャディックは、劉大紳の家で「老残遊記」二集を見ている。これは、いうまでもなく『天津日日新聞』の切り抜きを筆写したものだ。だから、彼が a copy と表現しているのは正確である。

では、1962年の魏紹昌編『老残遊記資料』に収録された二集第7-9回がもとづいたのは何か。

奇妙なことに、劉厚沢の説明が分裂している。二集第7-9回も良友本と同じく切り抜き本に拠っていると書いている（劉厚沢注釈3。『老残遊記資料』91頁）。だが、ずっと以前の1954年に、所有していた鉄孫が死去して、切り抜きは行方不明になっていると説明しているではないか。矛盾した文章だ。

『天津日日新聞』の切り抜きと『老残遊記資料』収録のものを照合すれば、すぐにわかる。

つくられた副本は急いで筆写したから、いくつも写し間違いが生じた。現在魏紹

昌編『老残遊記資料』で読むことのできる二集第7-9回は、その筆写原稿にもとづいていると私は断言する。私がそれを知っているのは、『天津日日新聞』連載の二集9回を原物で確認しているからである。誤写した文章が『老残遊記資料』でそのまま活字になったというわけだ。

広い中国のことだ。初出の二集9回はどこかに所蔵されていると思う。だが、あるという報告を読んだことがない。現在のところ、日本に存在する切り抜き9回分が、世界で唯一のものだということになる。

二集の第10-14回は、シャディックの希望を裏切って出現しないだろう。つまり劉鉄雲は9回までで執筆するのを中止した。それ以上は書かなかったのだ。1970年代から、私は、二集は9回しか存在していないと主張している。

シャディックの前言は、李疑今らと楊夫妻の英訳が、当時、すでに入手困難であることをのべて終わる。

そうして、シャディック英訳本は、新しく組み直されて現代によみがえった。

*THE TRAVEL OF LAO TS'AN* 老残遊記 (英漢対照) 劉鶚 (LIU E) (美) 哈洛徳・謝迪克 HAROLD SHADICK 英訳 南京・訳林出版社2005 大中華文庫

翻訳箇所：初集20回

使用版本：亜東図書館本および人民文学出版社本

堅表紙の2冊本。「大中華文庫」のひとつとして出版された。叢書の目的は、漢語原文に英訳をそえて中国の伝統文化典籍を世界に紹介しようとするものだ(楊牧之「総序」)。「老残遊記」の場合は、シャディックの英訳が先あって、あとから原文を添付した。

影印本ではないから、構成上いくつかの変更がある。

山東省地図は削除した。原版にある写真8頁12枚はそのまま全体を冒頭に移動した。英語説明文それぞれに漢訳がつけてある。以下にそれを引用する。

図1：未発表的《<老残遊記>外編》手稿。(樽本注：外編手稿はすでに公表されている。ここには注をほどこす必要がある)

図2：拝訪《老残遊記》作者的兒子劉大紳の住処。最右辺為劉先生，訳者在最左辺。(樽本注：そのほかの人物名については上に説明しておいた)

図3：濟南高昇店店主，拋称老残曾在這間三進房間里住過。

図4：歴下亭の入口処。那男孩手拿着一束蓮蓬。注意大門兩側的对聯及内門上方的匾。

図5：歴下亭景色。

図6：從大明湖北遠眺千仏山。

図7：趵突泉邊的呂祖殿。

図8：濟南護城河邊的搗衣婦女。

図9：趵突泉の水湧。其中一個正在被加蓋以供城市用水。

図10：從西北方向看金泉書院。注意前景中的芭蕉。

図11：濟南北邊的黄河上雒口港。前景中為兩輛独輪推車。

図12：一衙門後部的居住区（山東汶上県）。

本書には、新しい写真が加えられた。

ひとつは、『老残遊記』表紙だ。

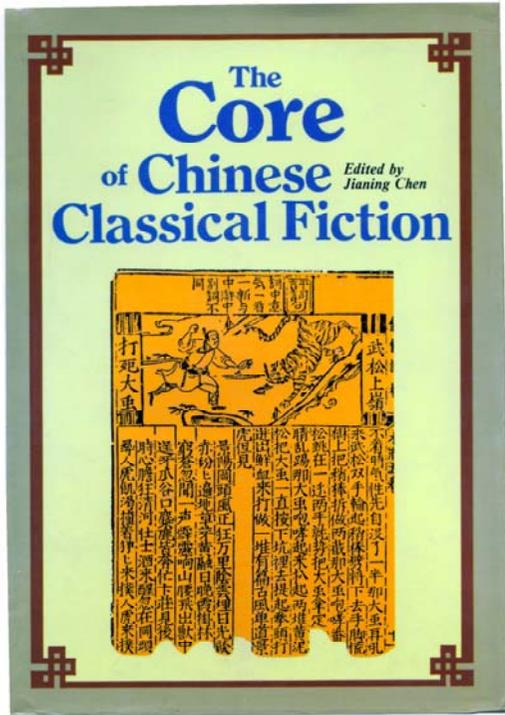
研究用として考えれば、図版として掲げる価値のある重要資料は、限定される。

あげるべき価値のあるものは、「老残遊記」下書き手稿、『繡像小説』掲載の第1回部分、天津日日新聞社版初集、『天津日日新聞』連載の二集、「老残遊記」外編手稿だ。そのほかは、『老残遊記』の各種版本の表紙だろう。

ところが、掲げられている版本は私の記憶にないものだ。しかも、どこを見ても出版社発行年月が書かれていない。私は、『老残遊記』全部の版本を見ているわけではない。が、この表紙は見た感じがなんとなく新しい。知らないことは当事者に聞くに限る。該本の関係者に問い合わせると、なんと偽版なのだそうだ。はじめの8頁が小説の内容であり、そのほかは濟南解放の報道記事だという。インターネットで見たこの表紙がいいので収録した、との返答である。これには、私は驚いた。「大中華文庫」は学術出版だとばかり思っていた。挿し絵のひとつひとつについて学問的価値のあるものを厳選して収録していると考えではないか。わざわざ掲げているのだから重要版本だ、と普通は受け取るだろう。私の見たことのない『老残遊記』の表紙だったので疑問に思った。偽版だとは、なんだか肩すかしをくった気分だ。

目次があって、つぎに劉鶚（1857-1909）肖像がある。前歯2本を見せて笑顔である。こちらもインターネットから引用したという。

劉鉄雲には、それほど多くの肖像写真が残っているわけではない。劉徳隆氏に質



1990年部分訳

問をした。千仏岩で撮影したものであろうとの返答であった。それならば、今までにいくつかの書籍に掲載されている。「大中華文庫版」掲載の肖像は、それを部分拡大し修正を加えたものか。

哈洛徳・謝迪克「訳序」がつづく。「訳序」にはあらたに漢訳がつけられた。ただし、上で私が問題にした箇所もそのまま翻訳している。問題があるという認識がない、ということだ。

『老残遊記』初版表紙が出現する。これにも説明文はない。天津日日新聞社版だ。その不鮮明な写真から、どこかの印刷物から複写したことがわかる。本文第11回までが第1冊に収録される。書名にある老残 LAO TS'AN のつづりからわかるように、ピンイン表記には書き換えてはいない。そういう編集方針なのだろう。

第2冊は、本文第12回から第20回までを収録。注釈の最後に張徐芳、許冬平訳とある。附録第九回篇首所録詩歌的注釈（張徐芳訳）、詞彙表（張徐芳）がつづく。英訳原書にあった Key to Chinese Pronunciation は省略する。

使用した漢語版本は、私が照合してみると亜東図書館本だけではないことがわかった。人民文学出版社本も使っている。これについても該書の関係者に問い合わせた。亜東図書館本では前後が一致しない部分があったので、人民文学出版

社本を参照し書き直したという。というわけで、亜東図書館本と人民文学出版社本の併用だと表示する。

該書には、モーニングサイド版につけ加えられたシャディックの訳者前言を収録してもよかった。訳者の貴重な証言を含んでいるからだ。なぜそれをしなかったのかは不明だ。もしかしたら、この重版本は、一般向けの刊行物にすぎないのかもしれない。

その他

“The Travels of Lao Can” Liu E Edited by Jianing Chen *THE CORE OF CHINESE CLASSICAL FICTION* NEW WORLD PRESS, BEIJING, 1990

翻訳箇所：初集第12、13、14回部分

使用版本：人民文学出版社本

奥付の漢語表記は以下のようにになっている。陳家寧編『中国古典小説精選』北京・新世界出版社1990

冒頭に劉鉄雲の経歴紹介が簡単に行なわれる。版本などについての説明はない。一般向けの作品選だから、その必要はないと判断されたのだろう。

翻訳されたのは、主として翠環、翠花が語る黄河氾濫の様様である。章分けはしていない。

これ以外にも部分的に英訳したものがあるかも知れない。ご教示いただけるとありがたい。

## 5 おわりに

中国人ばかりでなく外国人も「老残遊記」を翻訳出版している。世界中に「老残遊記」を広めて新しい読者を獲得するのは、すばらしいことだ。だが、出版についていえば、後世の人間が、それをより完全なものとする努力をはらうことも必要だと思う。たとえそれが一般向けの普及版であってもだ。すなわち、当時の翻訳者たちが解説において誤解していた、あるいは十分に把握していないで誤ったいくつかの記述については、遠慮なく指摘し訂正しなければならない。

ただ単に過去の英訳を重版するだけであれば、半世紀以上にわたって版本研究がまったく進んでいないと宣言しているのと変わらない。専門家の責任は重大である。

ただし、誤りだと判明していても原文を書き換えてはならない。原文を尊重しながら、注という形で指摘すれば十分ではなからうか。学術的に正確な記述をしてこそ、「老残遊記」の真の姿を世界中の読者に知ってもらうことになる。私はそう信じて疑わない。 罫

【附記】柳存仁氏、劉徳隆氏、許冬平氏よりご教示いただきました。感謝します。

【注】

- 1) 宮本昭三郎『源氏物語に魅せられた男 アーサー・ウェイリー伝』新潮社1993.3.15。本書は英訳「老残遊記」について触れていない。
- 2) 『人間世』という雑誌についてうまく表現している松枝茂夫の文章を引用する。  
「やがて私（注：松枝）は「中国文学研究会」と関係を持つようになり、再び現代中国の文学に興味をおこし、『人間世』という雑誌を最も愛読するようになった。これは才人林語堂を主編者とする最もスマートな小品文雑誌であった、その一枚看板として押し立てられているのが外ならぬ周作人その人であったのだ」「周作人について」『中国文学のたのしみ』岩波書店1998.1.23。165頁
- 3) 郭著章等編著『翻訳名家研究』（漢口・湖北教育出版社1999.7）に「林語堂（1895-1976）」がある。郭著章「二、林語堂の著作と翻訳」は、英書漢訳として「*A Nun of Taishan and Other Translations Translated by Ling Yutang*（《英訳老残遊記及其它》）、又称 *A Nun of Taishan and Other Translation*（《英訳老残遊記第二集及其它選訳》）」（101頁）と書いている。なぜ、ふたつの書名を掲げるのか不明。正確な翻訳名は、本文に掲げている通りだ。もしかしたら郭著章は、英訳原書を見ていないのかもしれない。林太乙「三、林語堂中英文著作及翻訳作品総目」では、英文著作の1935年に *A Nun of Taishan and Other Translation*（英訳老残遊記第二集及其他選訳）を配列する。1936年の間違い。漢語表記もおかしい。このような不正確な表記を見ると、林語堂の英訳原書は入手しにくいのだろうかと思う。
- 4) 木山英雄『人は歌い人は哭く大旗の前 漢詩の毛沢東時代』岩波書店2005.8.23。3頁。なお、「冀野文鈔」4冊（盧前（字冀野）の著作。『盧前曲学四種』『盧前文史論稿』『盧前筆記雜鈔』『盧前詩詞曲選』いずれも北京・中華書局2006.4）には、楊憲

益の2005年6月1日付署名のある「序二」が収録されている。

- 5) 郭延礼「《老残遊記》在国外 為《老残遊記》発表百周年而作」
- 6) 劉徳隆・朱禧・劉徳平編『劉鶚及老残遊記資料』四川人民出版社1985.7所収
- 7) シャディックの経歴については、以下の文献を参照した。

Harold Shadick "The Travels of Lao Ts'an : A Social Novel" (*THE YENCHING JOURNAL OF SOCIAL STUDIES* vol.2 no.1 北京1939.7)

哈羅徳・謝迪克著、劉徳平訳「《老残遊記》英訳本前言」(劉徳隆・朱禧・劉徳平編『劉鶚及老残遊記資料』)につけられた注1(475頁)

1990年モーニングサイド Morningside 版の著者「前言」

黄光域『近代中国専名翻訳詞典』成都・四川人民出版社2001.12

- 8) 漢訳がある。ただし、原文の一部分を省略している。哈羅徳・謝迪克著、劉徳平訳「《老残遊記》英訳本前言」劉徳隆・朱禧・劉徳平編『劉鶚及老残遊記資料』所収 / 王継権、周榕芳編選『台湾・香港・海外学者論中国近代小説』南昌・百花洲文芸出版社1991.10所収
- 9) 劉大紳「關於老残遊記」注13。魏紹昌編『老残遊記資料』所収。60頁
- 10) 劉大紳「關於老残遊記」魏紹昌編『老残遊記資料』所収。58頁。注13、60頁

(たるもと てるお)

【追記】パンダ叢書の別版について。奥付の著者を劉鶚に訂正した再版がある。同じく奥付表記では、訳者は楊憲益、戴内迭、出版発行は該文出版社、2005年1月の発行年になっている。もとの新書判より判型を大きくし表紙に新しい絵を飾る。新しい絵とはいえ、戴鴻森「再版後記」のある北京・人民文学出版社本(1989.5)に添えられた6枚のうちの1枚だ。